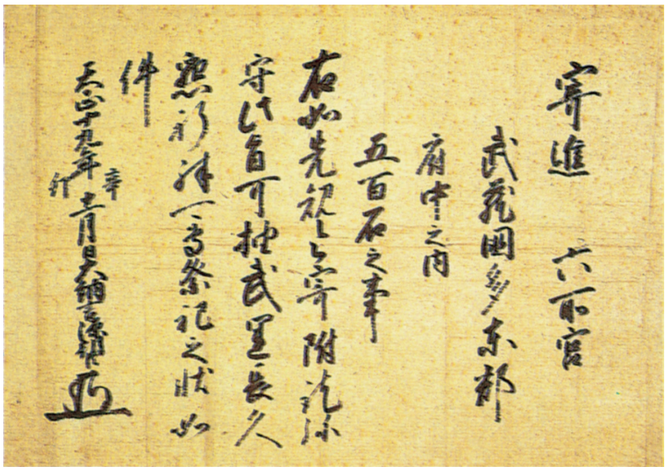
7 江戸時代の府中

(1) 徳川家康と六所宮



徳川家康の寄進状

寄進　六所宮
武蔵国多東郡
府中之内
五百石之事
右如先規令寄附訖弥
守此旨可抽武運長久
懇祈、殊可専祭祀之状如
件
天正十九年　辛卯　十一月日
大納言源朝臣（花押）

（注）　六所宮　大國魂神社は江戸時代まで六所宮と呼ばれた。

上の写真を見てみよう。これは徳川家康が六所宮（現在の大國魂神社）に社領を寄進したときの寄進状である。

1590年（天正18）豊臣秀吉は小田原北条氏を滅ぼし、その領地を徳川家康に与えた。

江戸に入った家康は翌年、六所宮に社領500石を寄進した。また、大坂の陣の際には、戦勝祈願を行ったとされる。

現在、天然記念物となっているケヤキ並木の両側の馬場二筋が戦勝後のお礼として家康から寄付された。

国指定天然記念物　馬場大門のケヤキ並木

1603年（慶長8）江戸に幕府が開かれてから後も、家康や秀忠は鷹狩りや多摩川での納涼のためにしばしば府中を訪れていた。

また、将軍献上用の瓜畑が設けられ、馬市では将軍用の馬が買い上げられるというようなこともあった。

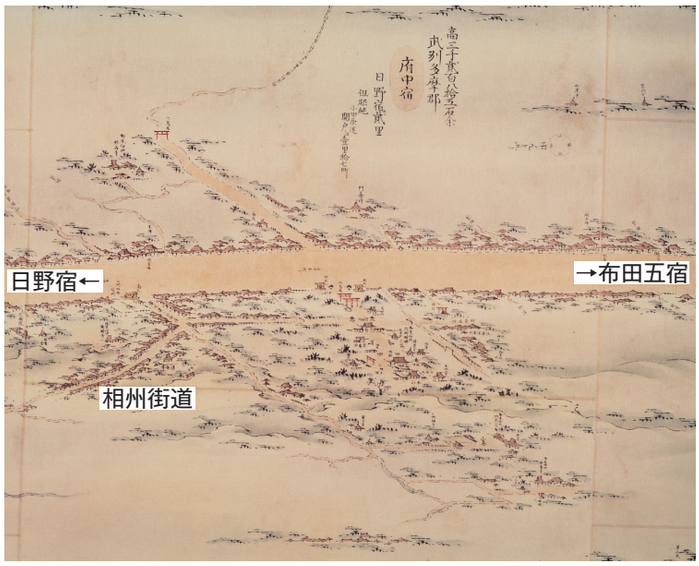
⑵ 府中宿と甲州街道

◎府中宿

江戸幕府が五街道の一つとして甲州街道（甲州道中）を整備すると、府中はその宿場町となる。

府中宿は、江戸と下諏訪を結ぶ甲州街道の、道中45の宿場のうち江戸日本橋から9番目の宿場として栄えたのである。府中宿は甲州街道では大きな宿場だった。

府中宿は、府中三町と呼ばれる本町、番場宿（宮西町）、新宿（宮町1・2丁目）の3村よりなり、荷物や人の輸送にあたる問屋場が各村にあった。



甲州道中分間延絵図　重文　複製
19世紀初め、道中奉行の下に編纂された
詳細な街道絵図の一つ

人馬各25を常備し、東は布田五宿（調布）まで、西は日野宿までの輸送を受けもった。また、横継ぎの伝馬役も勤めねばならず、甲州街道と交差する川越・相州両街道の輸送も受けもった。この助郷と呼ばれる制度のため、付近の農民は農繁期にその労働力を奪われることもあり、負担であった。

本陣・脇本陣は宿場に設けられた大名・公家などの宿泊施設である。府中宿では、本陣は本町に、脇本陣は番場宿と新宿にあった。

また、一般の旅行者も利用した旅籠屋が数多く立ち並んでいた。現在も幕府のお触れなどを掲げた高札場が残っており、当時の姿を現在にとどめている。

大國魂神社例大祭や7月と12月のみそかに開かれる市のときには、周辺の村々からも多くの人々が集まり、府中宿は、近在の村々の中心地であった。

宮西町５丁目角の高札場（都指定文化財）

⑶ 商家や農家の暮らし

1843年（天保14）の資料によると、府中宿には商業を営む家が142軒を数え、このうち旅籠屋は29軒にのぼった。

代表的な商家の田中家は1790年（寛政2）頃より柏屋という屋号で酒、反物、荒物などを商いし、大店に成長した。

旧田中家住宅（郷土の森博物館）

当時の商家は特定の商品に限らず、様々なものを商い、この田中家も穀物を商ったり、旅籠屋を営んだこともあり、明治に入ると質屋も営業していた。商家としてだけではなく、大地主となり百姓代として村政にも参加していた。田中家では明治5年の所有地の生産高は95石で、府中三町の中でも最大の土地所有者であった。

一方、茅葺農家である越智家は江戸時代後半に建てられた。ハケ下の農家では稲作のほか、野菜や茶、麦作を行い、また、養蚕を手がけたこともあった。また、河内家は江戸時代後期に大沢村（現在の三鷹市）に建てられ、後に人見村に移築されたハケ上の農家である。（復元されたものは明治後期の養蚕が盛んだったころの姿）

当時府中は、寺社領を除いては幕領か旗本領であった。人々の生活はいろいろ制限され、収穫の40～50％を年貢として納めさせられた。さらに、尾張（愛知県）徳川家の御鷹場※1や捉飼場※2などの費用や労役まで負わされた。

旧越智家住宅（郷土の森博物館）

旧河内家住宅（郷土の森博物館）

※1　**御鷹場**　放鷹（鷹狩）を行う場所　　※2　**捉飼場**　鷹の訓練をするための場所

⑷ 新田開発

府中では、17世紀後半には、17世紀中頃から新しく開かれた田畑が全耕地のほぼ半分に達した。

「ムダ堀」と伝えられている大みぞのあと
幅15m以上、深さ5mにも及ぶみぞあとが、1996年（平成8）に清水が丘2丁目から発見された。

下染屋（しもそめや）・押立（おしたて）・番場宿（ばんばじゅく）・屋敷分（やしきぶん）・本宿（ほんしゅく）・四ツ谷（よつや）などの村々は北部へ耕地を伸ばした。

また、多摩川沿岸の低地では、崖下（ハケ下）のわき水や多摩川の水を利用した用水路の水により、次第に開発されていった。当時の用水には、府中用水、三か村用水などがある。現在では水路を残している所もあるが、用水路がすでになくなっているものもある。

江戸の水不足を救おうと、4代将軍家綱の代に水源を多摩川に求め玉川上水の工事が行われた。

最初は府中の八幡下（はちまんした）あたりから掘り起こし、滝（たき）神社から東へ向かって多磨霊園駅のそばを経て調布市の神代あたりまで堀り進んだ。

この時、掘削した堀は「ムダ堀」との名で伝えられており、「ムダ堀」に水を流すと、水は「かなしい坂」付近（東郷寺山門北口）で地中に浸透してしまい、この工事は終わったとの伝承が残されている。この後、取口を羽村に求め、現在の玉川上水が完成したのである。

武蔵野台地上の開発は17世紀中頃にこの玉川上水が引かれてからである。

⑸ 川崎平右衛門（かわさきへいえもん）物語

江戸時代中期の府中は他の武蔵野と同じように、田が少なく畑が多かった。武蔵野新田を開発した当初、農民の生活は楽ではなく、特に、1738年（元文3）からの大凶作は農民に大打撃を与えた。こうした農村を救おうと現れた人物が川崎平右衛門である。

① 1694年（元禄7）川崎平右衛門は押立村に生まれました。若い時から農業に熱心で、荒れ地の開発や殖産の技術にくわしく、押立村の名主として、自分の貯蓄でたびたび貧しい人々を救ったりしていました。

② 1738年（元文3）からの大凶作のとき将軍吉宗は寺社奉行の大岡忠相に人々の救済を命じました。その後、忠相の配下

の代官は武蔵野新田の農民の救助のため押立村の名主の平右衛門を訪ねます。1739年（元文4）、平右衛門は南北武蔵野新田世話役に任命され、飢餓に瀕していた農民の救済のために大活躍することになるのです。

③　平右衛門は村々を見回り、各農家の実状を調査し、その状況に応じて救済策をたてました。例えば畑作に必要な費用を借して、とれた雑穀で返済させました。それを蓄えて、凶作に備えました。また、農業に精をだすものにはほうびを与え、怠けるものには注意を与えました。さらに、春の食料に困る時期には用水の工事などを行い、工事に参加した大人にも子供にも食料を配っています。

④　平右衛門は、収穫が終わった直後に大麦、小麦、粟、稗、はと麦などを相場より高めに買い上げ、代官所の蔵に貯蓄し飢饉に備えました。肥料なども江戸からまとめて仕入れて、安く農民に分けています。

⑤　さらに、平右衛門は大和（奈良県）の吉野や常陸（茨城県）の桜川から、桜の苗を取りよせ、玉川上水のほとりに約2里にわたって植え、堤を補強し、また、農民たちの憩いの場としました。この桜は小金井の桜堤として、江戸市民にも知られるようになったのです。

川崎平右衛門像（郷土の森博物館）

⑥　1749年（寛延2）、平右衛門は代官として美濃国（岐阜県）に赴任し、輪中地帯で困難な土木工事を次々に行い農民たちの深い尊敬を受けました。その後、石見国（島根県）で代官を勤め、銀山の産出量の向上などに力を注ぎました。

平右衛門の墓は押立竜光寺にありますが、各所に供養塔や報恩塔があります。

1739年（元文4）幕府から「苗字帯刀」を許された。

課題　川崎平右衛門はどんな人だったのか足跡を訪ねながら調べてみよう。

【秣場騒動】

1715年（正徳5）7月是政村の農民が、下小金井村にやってきて粟・稗・竹木・草などを刈り取ったことで騒動がおこる。下小金井村では、これを代官所に訴え出るが、今度は是政村のほか、上染屋村、下染屋村、車返村、人見村が加わり馬300頭、人足1,500人ほどが弓・やり・まさかりを持って押し寄せて、杉・檜・雑木など57,000本あまりを切り取り、畑の作物まで踏みあらした。この事件は秣場の使用をめぐって起きたことから、秣場(※1)騒動と呼ばれている。

（「府中市史上」より）

※1 秣場　一村または数か村の農民が共同で肥料や飼料とする草や柴などの刈り取りに利用する入会地。村と野の境界が明確でない場合、利用をめぐる利害で対立が起きやすかった。

(6) 江戸時代の庶民の信仰

庶民の生活のありさまを物語るものとして庚申塔がある。

江戸時代に盛んに建られた庚申塔とは何であろうか。

これは体内にいる三匹の虫（三尸虫）が庚申の夜に人が寝ると、天を昇り天帝にその人の悪事をつげ、その人の生命を縮めるという教えに根ざしている。

これを防ぐため　人々は、庚申(※2)の夜には当番の家に集まり寝ないで夜明けを待った。

この集まりは明治以降衰えたが、この民間信仰に基づいて庚申塔が建てられ、現在に残っているのである。

庚申塔（本願寺）

※2　庚申　古代中国（殷王朝）に現れる日付を表わすために用いられた干支の組み合わせのひとつ。

【狐などにだまされた話－蛍(ほたる)がりの娘(むすめ)】

競馬場のできる前に庚申塚(こうしんづか)があったんですね。ちょうど今１号館のあたりかしら（１号館の観覧席(かんらんせき)の東側、お宮があった）。庚申塚(こうしんづか)って回りが田んぼで、ちょびっと森があったんです。

母から聞いた話ですけど、母の親の弟が、夫婦で夜通ったんですって。そしたらきれいな女の人が、蛍(ほたる)をとっているんだってね。「ずいぶんこんな夜中に蛍なんかとって」て言ったら、「こんなにとったのよ」なんて言ってるんですって。森がそこにあるし、「危ないから送っていってよ」ってわけなんだって。「送っていってよ」というから「じゃあ、送ってあげるよ」って先へポツンと歩きだしたんですって。

娘さん後からついてくるんだと見たら、いないんですって。それで蛍がチカチカ光っているのが、消えちゃったし、娘さんの姿もないんだって。だから、やっぱり森の所にお狐(きつね)さんがいたんじゃないんですか。で、通る人、そうやってだますわけね。

（府中の口伝え集より）

その他、あまり娯楽のなかった農村の人々は、日待ち、月待ちの行事などを通して、互いの心の交流を図った。

写真の二十三夜塔は、月待ち塔の一種で府中に四基確認されているものの一つである。

旧暦の二十三日の晩に女性が集まり、勤行(ごんぎょう)※1をし飲食を共にする講(こう)※2を記念して建てられたものである。関東地方や長野県に多く分布し、「二十三夜」「三夜待ち」などとも呼ばれていた。

二十三夜塔（郷土の森博物館）

※１　勤行　仏像や仏壇の前でお経を唱えたり手を合わせること

※２　講　神仏の信仰を中心に結ばれた組織

課題　秩場騒動が起こったころの農民の生活や幕府の政治について調べてみよう。